

「ラオ」の所在

林 行 夫*

Where Are the “Lao”? : Differentiation and Involution of Ethno-regional Identity Associated with the Self-promotion of Cultural Representation in Northeast Thailand and Lao P.D.R.

HAYASHI Yukio*

This paper describes the dynamics of inter-ethnic and inter-regional relations among the “Lao,” a Tai speaking people, most of whom reside in Northeast Thailand and Lao P.D.R. on either side of the Mae Khong River. It focuses on definitions of the “Lao” among the neighboring “non-Lao” peoples and the recent development of promotion of self-culture associated with the processes of nation-centered tourism. An attempt is also made to clarify the process of differentiation and involution of Lao identities in terms of socio-historical setting of the region in the construction of nation-states under different conditions.

The formal designation of Lao has disappeared in Northeast Thailand, where the alternative regional identity of “Isan” has been propagated through the centralization of provincial administration over the past century in parallel with the spread of the educational system. In Lao P.D.R., Lao formally denotes nationality in general, whereas the non-Lao peoples still have other identifications to define themselves in each local context. However, the informal (living) expressions of the “Laoness” which are identified in the relationship with neighbors are still observed in peoples’ memories and activities in both regions.

The recent development of tourist policy along the Mae Khong River has accelerated the promotion of their formal-cultural identities in different ways. Fragmented ethnic cultures are often employed in showing their peculiarities, which is often reified like as biological indications in the eyes of foreigners without paying attention to the local ways of definition of their reality. Lao identification, in a sense, has no meaning in institutional terms, but is still alive in their everyday usage to differentiate themselves from others in terms of socio-economical and political-cultural superiority to the non-Lao.

Key word: Lao, Lao P.D.R., Northeast Thailand, ethnicity

I はじめに

本稿は、東南アジア大陸部の主要民族であるタイ系諸族のひとつ「ラオ」の所在を、二つの異なる国民国家（タイ王国とラオス人民民主共和国）間の関係と一地域における非タイ系民族

* 京都大学東南アジア研究センター；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

との関係において考察する。実体化されたラオを前提とする二国関係論や難民を主とする越境民族論を脱し [cf. Mayoury and Pheuiphanh 1994; Waters 1990], 両国での現地調査で得た資料に基づいて、為政者や知識人によるラオの記述法、非タイ系民族によるラオの了解論、コメ品種交換等に着眼しつつ、ラオという民族表象をそれぞれの過去と現在、リテラシーとオーラリティの領野において問うことを目的とする。¹⁾

前世紀末よりメコン川を隔てて二つの国家に分かれ住むことになったラオ人は、それぞれの国家と地域で生活世界を編制してきている。18世紀から今世紀にかけてラーンサーン王国の分裂、植民地化、社会主義国への転成を対岸にみたタイ国では、脱ラオ化政策により、東北タイの地域アイデンティティの「イサーン」が生成した。他方、ラオを国家名称としたラオスでは、後の内戦から社会主義体制への経験を軸に、タイ国側の為政者が与えてきた「政治・文化的な従属者」ではなく、多民族国家を担う同胞の総称としてラオを喧伝してきた。国家間関係からみれば、ラオという指標は、相互に自他を差異化する過程をへて消滅ないし変成してきたという一面をもつ。しかし他方で、隣人との関係で織りなされている地域空間では、非タイ系の周辺民族との関係においてラオが相互を差異化する指標として生きている。それは中央の政府や知識人、メディアが隠示的に含意し続けてきているラオ像とは異なるものである。

近年国境を挟んで盛んになった観光やその関連政策で生じつつある地域アイデンティティや、国民としての「民族文化」の呈示は、文化を資源とみなす指導層の思惑に呼応するものの、当該の人びとは、東北タイやラオスの場合、必ずしも郷土文化、民族文化の保持という目論見にそった見解をもつわけではない。すなわち、民族の異質な現実を生みだしているのは国境だけではない。個々の地域での具体的な隣人関係、累積されてきたまなざしなど、さまざまに相互を境界づけるまなざしが個々のラオ人社会をつくり、あるいは消え去りつつして新しい指標を与えている。自文化の特異性を表現する演出されたマーカーは、他方で消費主義の時代における一国家への帰属意識を拡充するのに役立っている。

Ⅱ ラオ語使用者としての「ラオ」の布置

言語集団分類や民族誌においては、ラオはタイ語族であるとともに、独立した民族名称とし

1) 以下で使用する資料は、主として日本学術振興会拠点大学プログラムからの資金援助を得て1992年12月、93年10月から12月にかけて実施した「東北タイにおけるラオ農民史における民族間関係」に関する現地調査で得られたものである。調査期間中に聞き取りを実施した集落は、東北地方5県におよぶ総数34カ村（ヤソートン [17], ウボン [8], シーサケート [3], サコンナコン [5], ナコンパノム [1]）である。そのなかに含まれる言語集団は、ラオ、プータイ、クメール、スウェーイ（クイ）、カルーン、ニョー、ヨーイ、ソー、およびクラーの末裔である。ラオス関係の資料は、1990年から92年、96年に実施した調査に基づく。主な調査地は南部（セーコン、チャンパサック）、北部（ボケーオ、ルアンパバーン）などである。

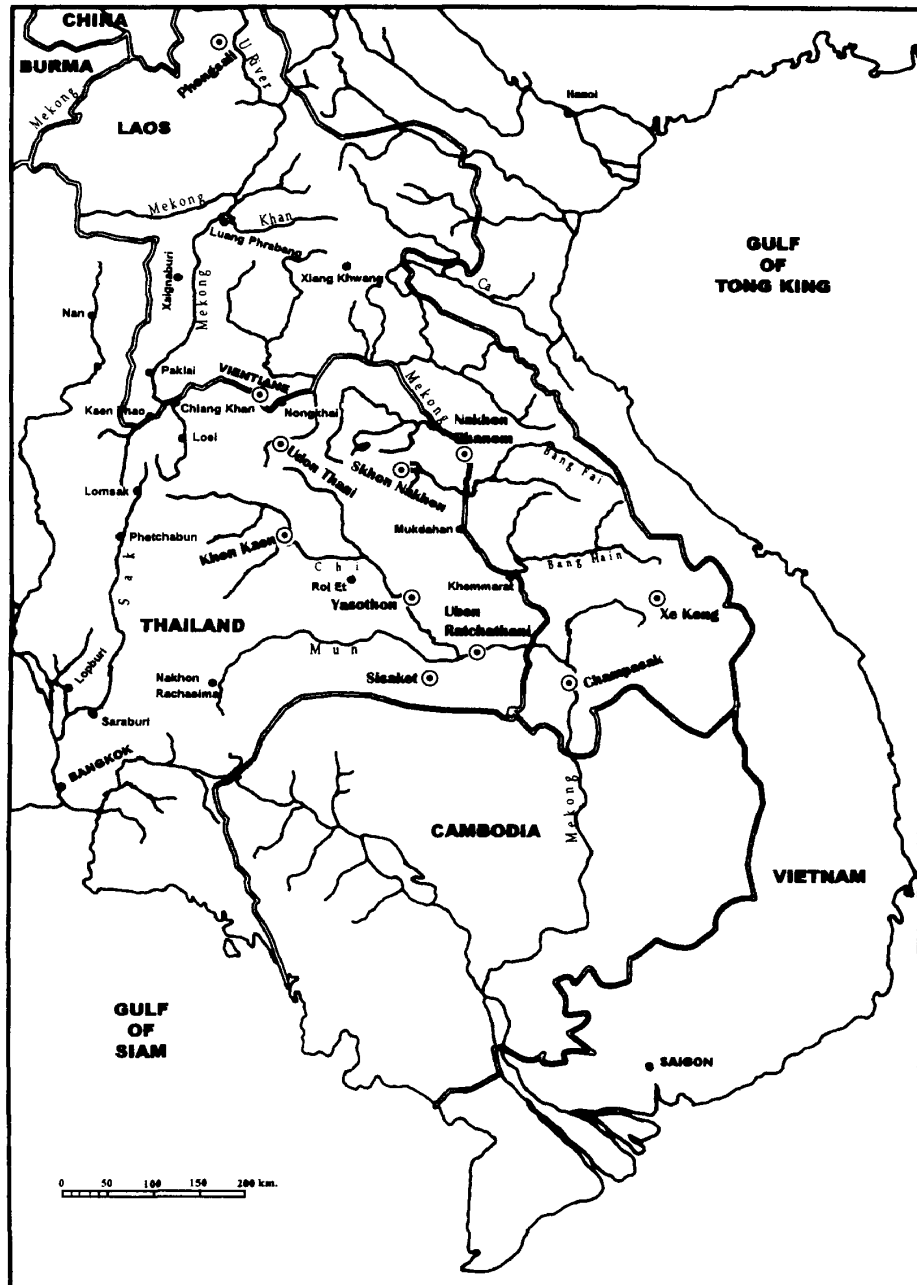


図1 主要調査地 (◎)

て存在する。今日の標準的な言語集団の分類ではタイ系諸語族(Tai speaking people)のひとつである。タイ・カダイ系諸語に属するカム・タイ語群チュワン・タイ語群の南西タイ諸語とされる言語の話し手である(紅河より南西部のタイ族)[三谷 1984:65-66]。以下では東南アジア大陸部でメコン川中流から下流部にかけての地域、すなわち今日のタイ国の東北地方とラオス人民民主共和国(以下ラオスと表記)の主要住民で、ラオと自称ないし呼ばれてきた人びとの総称として使う。

現在のタイ国側に移住したラオには、大別して二つのタイプがある。ラーンサーン王国ない

しその分裂後のラオの王国での内紛や政争から逃れ、東北タイのコラート高原上に拠点を築いてきた移住者、そして18世紀以降タイのラタナコーシン王朝成立後に戦争捕虜として強制移住させられて現在の中部タイや東部タイに住むことになった人びとである [Srisakara 1990: 278]。数の上では前者が卓越する。後者は華人と混淆し、かなりの程度「タイ国人化」しているとされる。ラオはそのエスニシティの特徴として山間盆地、低地平野、高原部で水稻耕作を営み、身体や集落の境界と関連する精霊や魂の観念とともに、出家と戒律主義を旨とするスリランカ系の上座仏教を信奉する人びととして記述される。また、タイ語族全般に共通するが河川ぞいの交易に長じ、その「場」を創って東南アジア大陸部で先住民族より優位にたった民族としても描かれてきている [Seidenfaden 1958; Lebar *et al.* 1964; Stuart-Fox 1986]。

「ラオ」の現在人口数の特定は、二国に限っても容易ではない。所属する国家が同一基準のもとづいて「国定民族」を公表しているわけでない。また、後述するように、タイ国側では国民国家領域内における地方化と連動するかたちで脱ラオ化（タイ地方民化）されてきた経緯をもつ。ラオの名を国名に冠するラオのほうは、ラオ国民化を促進しつつ、対外的なアイデンティティとしてラオを民族指標から脱色しようとしている。国家を単位とする差異化の局面のみに注目すれば、ラオは「民族」としては存在しないという議論も可能である [cf. Sisak 1995]。もっとも、こうした見方は「民族」という用語が当該社会でいかに運用されているのか、あるいはされてきたのかという歴史的事実によっても左右される。

今日のタイ国では、制度上国内での「民族籍 *chuachat*」ないし「民族 *chattiphan*」としてのラオを認知しない。学士院版国語辞典での語意も、隣国ラオス人民民主共和国のタイ系住民とするのみである。²⁾ 他方のラオス人民民主共和国においてラオといえば、一義的にラオス国民一般をさしている。1899年、フランス植民地政府は民族名ラオの複数形であるラオスという国名を採用した。社会主義体制以前に公刊された『ラオ語英語辞典』は、ラオの語義のひとつに「民族、国家の名称」をあてている [Kerr 1972 Vol.2:1016]。だが市場開放政策採択後に出版された『現代ラオ国語辞典』は、ラオの語義に「インドシナあるいは東南アジアに位置する高度な文明を有する国家、ひとつの民族国家(sat)」をあて [Thongkam 1992:661]、個別の言語集団名としての意味を後退させている。

ミャンマー、ベトナム、中国と異なり、ラオスは政府が特定する「民族 *sonphao*」の詳細を正式公表していない。ただし、地形の高度に応じて三つの住民呼称があり、それぞれにラオが

2) 例えば『サイアム・アルマナック1992-94』中の「民族 *chattiphan* 一覧」では、タイ族、タイ・ルー、タイ・ダムなどがタイ国内の民族として記載されているのにたいし、東北タイのラオ系住民に該当するものでは地域・地勢的なアイデンティティを基礎にした「タイ・コラート」のみをあげる。もっともこの一覧表は「タイ国内の民族」としながら、タイ国外の民族名も列挙するという奇妙なものではある [Samrit 1995:174-176]。『仏暦2525年学士院版国語辞典』では、タイとはタイ国人であり、ラオとはラオスに住むタイ人の一支派とする [RBS 1982]。

付されている。低地で水稻耕作に従事するタイ・カダイ系諸語の話者（本稿でいうラオ）をラオ・ルム（低地ラオ Lao Lum）、山腹で焼畑耕作する主としてモン＝クメール系諸語の話者をラオ・トゥン（山腹ラオ Lao Thoeng）といい、山頂で換金作物栽培に従事するメオ・ヤオ語、シナ・チベット語を話すのがラオ・スーン（山頂ラオ Lao Sung）である。五カ国と境を接する内陸国で国土の七割が山と高原に覆われたラオスでは、1950年以来住民の連帯と社会統合を目ざしてこの分類を採用し、日常生活上でも事実上の民族指標となってきた。³⁾

政府関連部局は「民族」の掌握とその政策に苦慮している。1975年の解放以後、三分法にかわって個別民族名を採用すべしとする立場と、それは統合を揺るがす原因とみる派との不一致もある。以前は全国で820の民族が認知されたともいわれ、1985年の人口センサス・民族構成調査の実施後は、内容が示されぬまま68ないし65とされていた [Stuart-Fox 1986; Cordell 1991: xvi]。⁴⁾ そして、現在では43にまで整理されている [Khambai 1991:24-27]。そのセンサス結果に基づくと明記する社会科学院編『ラオス諸民族巡り』は序文中には47としつつ、本文に記載される民族名称の数は42である [WTS 1992]。序文では「さまざまな呼称をもつ諸民族は、従来ずっとラオス人(Khon Lao)を自称してきた」としつつ、民族文化を保持することとラオス国家統合の問題とは矛盾しないとくり返されている [ibid.:3]。本書の刊行に先だって1991年3月人民革命党第五回大会が開かれ「民族保護政策」が採択されている。民族文化振興政策と連動する表現である。いずれにせよ、本書はラオスの言語集団を表1にみるように6つ(Lao Thai ラオタイ語族, Mon-Khmer モン＝カメーン語族, Mong-Yao モング・ヤオ語族, Tibet-Phama チベット・ビルマ語族, Wiet-Muang ウィエト・ムアン語族, Han ハーン語族)に分類する。⁵⁾ 1995年に刊行されたフランス人による民族調査報告書は119の言語集団を区別し、ラオはタイ＝カダイ系諸語の25集団のひとつで推定人口を160万としている(タイ・ルー12万5千, タイ・ダム5万, タイ・ヌア3万5千人～と続いて記載) [Chazee 1995:33-56]。ここでは表1での数よりもラオは減少する。

3) 例えば「あなたは何族ですか(*sonphao dai*)」と尋ねると、ラオ・ルム、ラオ・トゥン、ラオ・スーンのいずれかで回答される。なお、この三分法はラオではなく最初に王党派についたメオ族のリーダーが提示したことによるともいわれる [Ovesen 1993:32]。

4) 筆者が1990年に訪れた際には68、翌年は38と聞いている。92年時点では「確実な統計をだせるのは首都圏を含む全17県のうち2県にとどまる」といわれていた。また、サーラワン県ラオガム郡では当地出身の郡長から「14の行政区よりなる当郡では構成民族数は25」と回答されたが、25の内訳を記録するものはどこにもないとのことであった。

5) ラオスで刊行された民族の比率を示す別の資料に『国家地理局ラオス地図集』がある [NGD 1995]。同書は言語集団を四語族(ラオタイ、モン＝クメール、モング・ヤオ、チベット・ビルマ)に分けて民族集団総数を46とする。ラオタイ語族を6民族からなる集団としている点は表1と同じであるが(但し個々の民族名の記載はない)、同書は1993年時点の全国人口を447万4千とするのでラオタイ語族は3百万以上(68.28%)となる。ラオの割合は探りようがないが、ラオタイ語族の伸張を印象づける記載の仕方である。

表1 ラオスにおける民族言語集団

1	Lao Thai ラオタイ語族	6
	Lao	1,804,101
	Phu Thai	441,479
	Lue	102,760
	Yon	33,240
	Nyang	3,447
	Saek	2,459
2	Mon-Khmer モンクメール諸語族	25
	Khamu	391,220
	Bit	1,530
	Lamet	14,355
	Sam Tao	2,359 (Tu Mok)
	Sing Mun	2,164
	Phong	10,173
	Thin	13,977 (Lua, lao Mai)
	Katang	72,391
	Taoi	24,577
	Pako	12,923
	Lawen	28,057 (Churu)
	Katu	14,676
	Ngae	8,917 (Kuriang, Kuliang)
	Alak	13,127
	Suwei	49,059
	Ya Hoen	3,960
	Oi	11,194
	La Wae	16,434
	Chleng	4,540
	La Liang	27,665 (Yae = Ta Liang, La wi, Kaseng)
	La wi	—
	Ka Seng	—
	Oi	11,194
	La Wae	16,434
	Chleng	4,540
3	Mong-Yao モング・ヤオ語族	2
	Mong	231,168
	Yao	18,091
4	Tibet-Phama チベット・ビルマ語族	4
	Ko	58,500
	Phu Noi	23,618
	Kui (La Khuya)	6,493
	Musoe	9,200 (Musoe Dam, Musoe Khao を含む)
5	Wiet-Muang ウィエト・ムアン語族	4
	Tum	8,233
	Mon	2,022
	Ngin	998
	Khari	924
6	Han ハーン語族	1
	Han	6,361

出所：[WTS 1992] より筆者作成。

東北タイについては、タイ国のマヒドン大学民族言語地図プロジェクト（第1期1992-95年）が公表する調査結果があり、同地域でのラオ語使用者は11,135,493人という [Suwilai and Naraset 1996:4 chart2]。これは東北全県人口約2千万（1992年時点） [Wilai *et al.* 1994] の約7割にあたる。タイ国内人口（5,770万／同年）の2割強を占めるが、首都バンコク人口の3分の1を占めるとされるラオ語使用者を含むと、タイ全土でおよそ1,500万と推定される。

ラオス側のラオを仮に160万程度とすれば、二国に跨るラオ語使用者の総数はおよそ1,700万弱となる。この数値は、メコン川中流域の「ラオ」のおよその趨勢を示す指標として了解したい。要するに、ラオがタイ国の主要な人口を構成する言語集団のひとつであるのにたいして、ラオス国内での多数派言語集団であるラオは、多く見積もっても東北タイのラオの2割にも及ばない。しかも、その主たる居住空間は国土全体で2割程の低地平野部に限られる。タイ国側のラオに自前の国家はないが、国土面積の3割を占めるコラート高原に集住する。⁶⁾

前者は、面積が小さくとも国家という最大限の政体領域をもつものに対し、後者は「地方」をその拠点とする。いずれにせよ、ラオは「少数民族」でも「高原民族」でもない。ただし西南中国を含む東南アジア大陸部地域での他国の「少数民族」同様、歴史的には辺境とみなされる地域の住人として認知されてきたことは一致している。

Ⅲ 差異化される「ラオ」

よくしられる「山地民」と「平地民」の分類範疇は、観察者が概念化したものではなく、当該地域で民俗知識 (folk classification) として通用する図式を観察者がとりだしたものである [Moerman 1968]。しかし、そうした分類は、立場の異なる者や当該社会で周縁化された者からすれば、また異なる様相をみせる。たとえ同一の言語集団であっても、相互を差異化する集

6) ラーマ5世時代以来の中部タイ側からの蔑称で、北部ランナー地方の人びとのことをラオ・ブンダム (lao phung dam)、元ランサーン王国からの人びとはラオ・ブンカーオ (lao phung khao) とする呼称がある。この違いは、腹から膝にかけての入れ墨の有無による。東北タイに住むラオは後者である。同集団はさらに細かくラオ・コーラート、ラオ・イサーンなどの「下位」集団に区別される。19世紀からの強制移住で現在のシェンクワンのプアン国から強制移住によってタイ側に入った人びとはラオ・プアン (lao phuan)、シップソーンチュータイ出身者はラオ・ソーン (lao song)、プータイ (phu thai) ないしタイダム (thai dam) と呼ばれる。ルアンパバーンからのラオは、ラオ・ルアンパバン (lao luang phabang)、ルアンパバーンでもとくにプーカンからの人びとをラオ・クルン (lao khrun) ラオ・プーカン (lao phukhang)、そしてヴィエンチャン出身者はラオ・ウィエン (lao wiang) と出自を明示する呼称をもつ。「ラオ」のこのような使用例は、中部地方の非ラオ人が、北部、東北部に住む「よそ者」をさす名称として使っていたことを示している。同時に、ラオは中部地方にも散住する。ラーマ5世時代、タイ国で最大の民族は、中国人とラオ人だったとするシーサククによれば [Sisak 1995:167]、ラオはタイ全国各地に散住する集団である。現在のプラーチンブリ、チャチュンサオには、強制移住によるラオ・プアン、ラオ・ウィアンが、カンペンペット、スコタイ、ウタラディット、ピサヌローク、ターク、ピチット、ベチャブンには、ラオ・ランサン、ラオ・イサーンが東北地方からの移住者として住んでいる。

合的な呼称は、自己を対他的に規定する過程で生じ、社会的勢力をもつ者がそれを広める。外部の観察者は、それが通用しているという経験的事実に基づいて、社会的勢力をめぐる複数の集団相互関係の当地での結果を、汎用性が高いという意味での「正確」な名称として記録する。したがって、誰の手を経て、いかにそこでの「通念」として制度化されているのかをみておく必要がある。

ラオは他称である。1930年商務通信省英文報告書は、東北タイのラオについて「自称はタイ、ラオはシャムによる他称」と記述する [MCC 1930:97]。ダムロンも、ラオという呼称はバンコク首都住民の誤った見方によるものであると記している [Damrong 1974:304-306]。この種の説明は、東南アジア大陸部の民族便覧に「ラオという名称は疑いもなくタイ北部、東北部に住むタイ語の話し手をさすものとしてシャム人が与えた」としてそのまま今日まで踏襲されている [Lebar *et al.* 1964:188]。

特定の地域と住人をさす「ラオ」は、16世紀半ばにポルトガル人が記録・紹介したことになっている [Yule 1902(1886):504]。しかし、西欧列強が急速に当地に接近した前世紀に数多く残された叙述は、ラオは当時のタイ（シャム）人だけが彼らにたいして使う呼称として存在するとしている。ラオは自称ではない。植民地ラオスの誕生後しばらくして各地のタイ族を訪問調査したドッドは、やはり中国、トンキン、ビルマ、シャムに住むラオ人が自らをタイとよんでいたことを記している。彼によればタイはシャム、ラオを含む総称である。そして、タイは中部地方のシャムを除いて基本的には内陸国の住人であり、ラオスのラオのように多くのタイは海域世界への道をもたなかった人びととしている [Dodd 1923: V, 309]。⁷⁾

タイ国側では1805年に編纂されたというタイ側の『三印法典』には、ラオはビルマ、モーン、クメール、ケークラと並んで、タイ（族）とは明瞭に区別される異族、異国人として記載されている [Ishii *et al.* 1990 Vol.4:2810-2811]。さらにラタナコーシン王朝初期（ラーマ1-4世）の為政者や歴史家は、東北地方のチー、ムーン川流域やメコン川沿いの人々をチャオプラヤー川流域の住人「タイ」と明瞭に区別して「ラオ」と記載する。ラオは蔑称となる。タイ仏教を刷新したラーマ4世（モンクット）王は1865年に首都バンコクからモーラムなど「ラオ芸能」の上演を禁じる布告をだしている。ラオの芸能がタイの地に根付くことは望ましいことではない、ラオはタイの隷属者であってもタイはラオに隷属したことはないとし、当時タイで大流行していたラオのケーン演奏を1-2年停止せよ、違反者は処罰するというものである。拒否されたのは芸能ばかりではない。掠奪された守護仏像の一体、パバーン仏さえタイ国内にあっては早魃の元凶となると忌み嫌われ返還された [Thawisin 1988]。

7) この見方は、示唆的である。今日の国家領域としてのタイは、海域世界に接近することで、かつてのタイの居住環境を自らの周縁（辺境）に位置づけ、結果的に港市国家－領域国家としてのシャムないしタイを構築しえたという逆説を教えるからである。

タイの知識人チット・プーミサックはこういう見解である。タイ系諸族が「カー（下僕）」と総称し蔑んだ先住民（モン＝クメール系諸語族）にたいする勝利者としてラーンサーン王国を建てたころ、彼らは自らを「タイ」と呼んでいた。ラオという名称は当時では、集権者、偉大なる権勢者などの社会的地位を示す人称代名詞に近い語として使用されたが、その後、同国を属国として統治しはじめたタイ（シャム）側領主は、自他を区別するために、彼らをタイとせず今日残る軽蔑の意味をこめてラオとよぶようになった [Chit 1976:384-388]。

この議論にしたがえば、現在のタイ国を築くに至った為政者が、タイという呼称を独占しようとしたわけである。チットはタイという名称を優位者が手にする「称号」的意味をもつものとして捉える。⁸⁾ タイでない者はカー（ないし精霊を意味するピー）である。その両者の間にタイより格下げされた通称としてのラオが位置づけられた。さらにチットは、ラオが語り継いできた神話伝承（タオ・フン）を引きつつ、ラオ人には古来より高い社会的地位にある人を意味する「ラオ」を誇りとする感情が存在していたので、そのような状況下におかれてもタイに固執せず、タイを棄ててラオを名乗り始めたとする。だが、為政者レベルでの動きとは別に、一般の人びとがいつ頃からどのようにしてラオを自称し始めたのかについては明らかにしていない [ibid.:389-390]。

他方で、為政者ではないラオスや東北タイのラオ人は、今世紀に入ってから相互にタイを自称していたらしい事実がある。東北タイ出身の地方史家トゥームが回想する文章からもみとれる。彼はラオという通称が自身とその仲間にたいしてあてられていることを認めつついう。「タイ族はラオであり、ラオ族はタイである。区別はできない。タイはラオの系譜をひいているし、ラオも自らをタイと呼ぶ。ルーイ県の人びと [同書第1巻では同県の創設者を「ルアンパバーンのタイ人 *chao thai Luang Phrabang*」と比定する [Toem 1970:333]] は、ウボンやローイエット、マハーサラカム、コーンケンから人びとがやってくるのをみると、タイ・タイ [該当箇所「注記」に「南側からのタイではなく、低地のタイ人」とする [cf. 林 1985]] と呼ぶ。逆にルーイ、ロムサック、ベッチャブーンの人びとがローイエットやコーンケン方面に行くとすると、当地の人びとは彼らを「タイ・ルーイ」「タイ・ロム（サック）」と呼ぶ。東北地方でも「ヴィエンチャンからの〈ラオ人〉がきたら『タイ・ヴィエンがやってきた』といっていた」 [Toem 1970:454]。

さらに使用言語についても、ラオ人自らが「タイ語」と呼んでいたらしいことをも含めると [cf. Briggs 1949]、一般住民の間でラオという名乗りの作法が広く定着するのは、仏植民地国ラオスの成立、つまり制度的にラオ国籍が確立してさらに後のことになるのだろう。民族呼称はそれが使用される文脈に依存して顕れる。それを他の言語集団が指標とし始めてからなのか、

8) 前掲の『ラオ国語辞典』は、「人間、偉大なる優れた人」という意味をタイにあて、二番目に「タイ国、タイ国人」をあてている。

トゥームが記すような呼称の背景には、国家以前のそれぞれの地域拠点の間で合意され通用する在地の「民族内関係」がみえてくる。同時に、こうした関係のなかにすでに国籍を背景としたタイ呼称の浸透過程をよみとることもできる。政体を異にする国家間関係を前提とした民族呼称のあり方は、記述者の社会経験の一部にもなっている。

東北タイ生まれの別の知識人はトゥームとは異なる視点で次のように記している。

東北タイ人は「ずっと以前から」自らをタイ人とみなしてきた。ラオス側のラオとの相違といえば、フランスに植民地化されていないこと、中部タイの文化を受容してきたことである。……双方のラオには往来がある。現在のラオスの政府高官で東北タイ出身者は少なくない。だが、東北人とラオ人がいかに近い関係にあり文化的にも似通っているとはいえ、東北人がいったん（現在の）ラオスの方へ渡れば、自らをタイであるという。ラオス側でも東北人を（ラオではなく）タイ人であるとみなすことになる。親戚同士でも同様である。両者は政治的に区別させられているのである。……かつて東北人は、中部タイ人にさしたる近親感や理解を示さなかった。中部タイ人と接触するときに東北人は自らをラオとよんだ。首都圏のタイ人も、同じタイ人でありながら区別して東北人のことをラオとよんでいた。[Ko 1990:165-167]

もともとメコン川流域に暮らしを営んできた同じ「タイ」人は、今日、相互に国籍を違える外国人どうしである。ラオとタイ（その旧名シャム）も、権力をもって相互に差異化しようとする為政者の自他関係において生じた。そこでは、政治的競合による同一言語集団内で勢力競合の関係があった。その意味では、国境が画定する国家こそ、生活者を集合的に差異化する制度的単位ではある。しかし、国家は生活者の現実を構成する強力な幻想のひとつではあっても、ある地域や民族から個人レベルにいたる多様な現実のすべてををからめ取る装置ではない。問題は、付与されたその名称を受容もしくは拒否する人びとが、いつごろからいかなる経緯でどのようにその名称や他の名称のなかに自己をはめこみ、利用しあるいは捨てるのかという点にある。国境が分断されて進行した個々の国家編制過程において、いにしえのタイ、かつてのラオは現在もそれぞれのアイデンティティを累積的に構築ないし呈示する過程のただ中におかれている。それは決して単線的軌道を描くものではない。

Ⅳ イサーンとラオ人民 「辺境のラオ」から「地方住民」へ

1920年代に、開設間もない村の初等学校で教師が教えた唄を今も覚えている東北タイの古老は多い。内容は「東北の地はタイのもの、われらイサーン、タイ国民として一致団結」という

ものである。⁹⁾ 第二次世界大戦中のピブーン政権下では、ラオを名乗らないことはもちろん、唄の名称や歌詞からもラオをはずすことが布告として強制されている [ibid.:167-169]。中央当局は、ラオにたいする旧来のまなざしを保持しつつ、行政措置においてはタイ国の一地方化を繰り返し進め、当地における民族アイデンティティとしてのラオを脱色させようとしてきた。¹⁰⁾ 東北地方に以前からあったラオを冠する地名を変更したり、民族名としてのラオの使用を法的に禁じたのは、植民地ラオスがメコン対岸に成立した1899年である。当時の改革を実質的に推進した内務大臣ダムロンは、ラオ人は存在せず東北タイの主要住民は同根のタイ人であると説いた [Damrong 1974:304-306]。首都中央の呼びとが抱く「異族、異人ラオ」は表向きには否定され、国民としての同一性が求められた。ラーマ6世以降、バンコクを中心に国家アイデンティティや「タイ伝統文化」が再編・創造される過程で、東北タイを拠点とするラオはその影の部分を負うことになる。チャクリー改革以前からの「辺境の地」コラート高原にそうした舞台設定は容易であった。ラオは中部タイ中心の正統文化とは逆像をなす周縁人となってゆく。

その文化的距離とは裏腹に、東北地方と中央政府との地理・政治的距離はその後一挙に縮小する。1920年代から30年代初頭にかけてバンコクからの鉄道が開通し、中央からの役人が常時派遣され、種々の法制措置が実効力をもち始める。東北地方のラオ人の社会史は前世紀末以来、バンコク中央政府による一地方への包摂過程をそのまま映すものとなった。とりわけ、農村部はタイの法制、教育、宗教そして経済の変化を直接的に反映する場となった。イサーンが今日のような地域にねざす用語へと膨らみ始めるのは、中央政府の政策を直接的に反映し東北地方農村全体が大規模な換金作物（ケナフやキャッサバ）栽培を通じて世界市場経済機構に投げ込まれた60年代以降のことである [cf. Keyes 1967:12, 39]。また、1962年にサリット政権がコーンケン県を地方開発政策の拠点としたことは、同地方を「悪漢」（共産主義者）と、米国の反共政策に歩調を合わせるバンコク政府とが対峙する緊張の場とした。こうした開発政策にいた

9) 唄の内容は以下。

daen isan pen khong thai
rao fai chai rak triem hai phrom phak
phua su sattu thang lai
chon khon khuai top ku su chat thai
daen isan pen khong thai
rao tong fai chai ban muang muan rua
nai mua thuan nam klua krasae lai
phai chuai kan chamkit ngan dai
khon thai tong kua makham
ya wang nai nam daen khong khong chang daen oei

10) 東北地方の地域アイデンティティの生成過程については、多くの先行研究がある [Keyes 1966; 1967; Breazeale 1975; Cohen 1991; Brown 1994]。

る経緯はイサーンを経済・政治のより広い文脈に位置づけ、人びとの生活世界を対外的に範疇づけさせる指標となった。さらに、ラオスを含む近隣諸国が相次いで社会主義国化するに及んでは、ラオス側の住人は「肝を喰う」共産主義者として喧伝され、東北タイのラオとの分離は急速に進んだ。そして、80年代初頭に東北タイ・ムクダハーンに隠る最後の共産主義者の投降をもって、同地方はタイの開発優先地域として一層中央と直結してゆく。同時に、このようなイサーンの地域アイデンティティの制度化過程は、タイ国内における「民族」という用語が、国籍不確定で国民国家に組み入れられていない人びとをさす言葉として特化してゆくことをも意味した。

東北タイが開発の時代に入ったころ、ラオ人のみならずラオス側の全住人は激動の時代を経験した。旧植民地体制から脱却するための社会主義化（1975～）、そして内戦、現在の対外経済開放政策（1986～）への道である。とりわけ、1945年以降の「30年戦争」とよばれる社会主義への道のりは、米軍による猛烈な秘密爆撃の傷跡が現在もいたるところにみられるように、物理的な暴力を全土にともなった。爆撃機は東北タイのウボンやウドンの米軍駐留基地から飛来した。ラオス側での聞き取りからでは、この経験はラオも非ラオもなく生存をかけた協力行動を促している。教条としての社会主義より、相互扶助を縦糸とした多数民族横並びの同胞主義の実践としてのラオ式社会主義が展開されてきた。すなわち、モン＝クメール系の諸民族や山住みの民とともに国造りをしているラオスのラオ人は、同国の周辺民族に対してきわめて明確な政治的・文化的求心力を創りだしてきた〔林 1994；1996a；Hayashi 1995〕。同時に、政府は民族(*son phao*)という個々の差異を、全民族(*banda phao*)たる「人民」(*pasason*)に解消すべく同胞化を企ててきている。その実現が容易ではないゆえにこそラオスでは民族の取り扱いが政治的に意識化されている。¹¹⁾ ラオス当局はタイ国では制度化されている「山地民」「少数民族」という用語や語法を、「主要多数民族」を言外の前提とするものとして慎重に避ける。

ラオ語を話す東北タイ住民にとって、ラオス側のラオとは、同じような言語を話す人びとであつたとしても、社会経済的に閉ざされた体制をもち、自分たちの生活水準より下位にある外国の名称と住民である。90年代に入り、標準タイ語で教育を受ける東北出身の人びとの間では、

11) 「民族文化保護政策」が1991年3月開催の人民革命党第五回大会で提唱された後の8月に、解放後初の憲法が採択された。憲法第1章第8条には「全民族は、自身および国家(*sat*)の文化習慣を保存振興する権利を有する」とあり、同条最終文章に「政府は（全項において）あらゆる民族の経済社会的レベルを徐々に伸張向上させるために尽力する」とある。

第13条にも同様の表現がある。そして、それらはハックサート（愛国）のモチーフ（第19条）に収斂されている。全民族が同様の人権をもつという主張は、「民 *pasason*」ということばがほとんど「全民族 *banda phao*」と対で使用されている（第1章第2条）ことから明らかである。ちなみに、憲法には「社会主義」という言葉がない〔SPS 1991〕。また、第30条において「ラオ国民は宗教の信仰、不信仰の自由をもつ」と明記するが、憲法発布後、国章はかつての槌と鎌から国宝仏教寺院タートルアンに変更された。

ラオと呼ばれることをあからさまに拒否する態度さえみられるが、それは「社会主義国化した異国」以前のラオの記憶を共有しない世代の間では、タイ国の一地方とその住民としてのイサーンという自己定位法が支配的になりつつあることを示している。首都バンコクへ働きにでる若者は、中部タイ人にラオ人とみなされても、イサーンを自称する。

にも関わらず、ラオという名称も意識も、百年近く取られ続けてきた政策の前に東北タイという地域から根こそぎ消え失せてしまいつつあるわけでは必ずしもない。ひとつには年代的なズレ、個人差をもちながらも持続している。自己の文化的なアイデンティティをなおラオに求める、分断されたラオはいずれ再び統合されなければならないと主張する高齢の知識人は存在する。¹²⁾

さらに東北タイのラオ人社会が成立する生活空間そのものに目を移すと明らかになることだが、その場を共につくってきた隣人関係、民族間関係において、きわめて実体化されたラオという民族指標がその担い手の自己認識とは別に存在している。ラオは東北タイ地方最大の言語集団であるが、同地方には非タイ語系の言語を母語とする集団も少数ながら居住する。モン＝クメール系諸語族であるスウェイ(自称はクイないしオイ)、チャオ・ボン(ニャークル)、クメール、さらにプータイ、ソー、カルーン、ニョーといった人びとである。そこは半世紀ほど前まで、タオーイやラデーといった先住の人びとが、かつて土中に埋めた彼らの財産の壺 [cf. Izikowitz 1951:300] を探しにラオス側から戻ってきた場所でもある [林 1996c ; cf. Suchit 1995]。これらの集団にあって、ラオは同地域における後発の集団である。しかし、現在、ラオ語はその担い手の圧倒的多数という事実によって非タイ系民族の社会に深く浸透している。年代がくだるほどに、タイ系でない諸言語集団の、とりわけ若い男女は現代タイ語、地方語としてのイサーン語に精通している [Miller 1994]。通婚も珍しいことではない。さらに、さまざまな言語集団がコミュニケーションするとき、ラオ語が同地域でのランガ・フランカである。そうした状況は、国家や中央との直接的な関わりとは異なる脈絡のなかで構築されてきたものであり、為政者が歴史的に表象してきた「ラオ」とも異なる。

V 東北タイに生きる「ラオ」——「半農民・半商人」

ナコンラーチャシーマーに居住する「少数民族」チャオ・ボン(chao bon, 言語集団名としてはニャークル)を調査したブリーチャーらによれば、彼らはあからさまな嫌悪感をもって、

12) 例えば、東北のラオの民俗書を多数著わしてきたウボン市在住のP氏や、チャンパサック王家の末裔で、近年新たに年中行事化したウボン市のラックムアン(国礎柱)儀礼を司るヤソートーン市在住のB氏などは、地元ではラオ賛美者として著名である。だが、現在中央当局からは危険視されるどころか、地方伝統文化に精通する郷土の名士、文化人として扱われている。

ラオとタイ（中部タイ）人を次のように観ているという。「[ラオは] どこかにバナナやサトウキビを求めて集まるモット・ンガーム [蟻の一種, *pheidologeton dversus*] のごとし [甘いものをみつければ群なし集まりたかって食い尽す]。われわれチャオ・ボンは何のおこぼれにもあずからない、蟻（ラオ）がすべて食べ尽くす」[Pricha *et al.* n.d.:3]。

この種の見解は、かなりの程度までコラート高原上の他の「非ラオ人」が共有する。しかも、流暢にラオ語を操って隣人であり、かつ他者としてのラオを語るのである。東北タイでは、ローカルな対面状況、隣人関係においては、相互を差異化するマーカーとしてのラオは依然生きている。ラオでない人びとからの聞き取り結果を総合すると、ほぼ共通して「半農民、半商人」のような行動をする人と集団をラオとみなす傾向がうかがえる。時代を遡るほどにそれははっきりする。ラオ人にすれば、よりよい暮らし向きの方途、地位向上を求めて、未耕地の探索や先住者との交渉を繰り返してきたのがこの半世紀の生きざまであった。同時に、頻繁に移動を重ね、異民族の娘と結婚して土地を手にし、それを後からやってくる仲間のラオ人に高値をつけて転売・村外出を繰り返してきたやり方は、頭がよく商い上手という印象を非ラオ人に与えている [林 1996c]。シーサケートに住むクメール人のある古老は、自己の利益のために先住者や異なる言語集団との交通交渉に長け、故郷をひとつとしないと揶揄しつつも、ラオは「羨ましい」人びとと評している。¹³⁾

東北タイの「非ラオ人」たちの目には、ラオ人は何らかの経済的利益を生み出すような知識や情報を持ち、どこへでも転々とかつ迅速に行動する人びと、ないしそうした利益をうみ出す知識をもって、自身の社会的勢力を伸張させる／させた人びとなのである。ここでラオは単にラオ語を母語とする人ではない。言語を自他を差異化する指標にするのはむしろラオ自身の方である。少数の非ラオ人にとって、言語は自他を区別する重要な指標ではない。東北地方在住のクメール人は別として、彼ら（とりわけ男性）はほとんど複数言語を操る。それが普通の言語環境になっている。カーやスウェイの人びとを公然と蔑視の対象とするラオも、彼らの言語能力を知っている。一言語に習熟することと、その言語の担い手の文化に同化することとは、ここでは無関係なことである [cf. Keyes 1995:147]。スウェイやヨーイはそうしたことを経験的に熟知している。いずれにせよ、今日の彼らがラオをみいだす時には、その社会、経済的な行動様式に、自他を差異化する規準をみいだしている。

他方で、東北タイのラオが蔑みのまなざしをもって語ってきた多くの「非ラオ」人の中に、例外的ともいえる少数者がある。ビルマから行商しながらやってきたタイ・ヤイ（シャン）やビルマ系の人びとである。ラオのみならず、東北タイの年輩者にはクラーないシトンスーと呼ばれて記憶されている。ラオの古老にクラーのことを問えば「寺院で寝泊まりしながら布を売

13) このラオ人像は、約半世紀前に記録されたラオス側のラオ人が実践する異民族間関係のありかたとはほぼ一致する [Izikowitz 1969:137]。

り歩いていた行商人」という決まり文句が返る。第二次世界大戦が勃発するまで、主にムーンス川流域の集落をぬうようにして布、衣服、銅鑼、銀器、宝石などを売り歩いた、当時ビルマ国籍をもつ外国人であった。クラーは特定の言語集団というより「異国人（とつくにびと）」全般を意味するビルマ語カラー *kala* に由来する。¹⁴⁾

人びとの記憶のなかのクラーとは、一様に背が高く頭に白いターバンを巻き、耳に飾り物をつけていた男である。牛車を使わず、ラオ人が作るより大きい籠を対にした天秤棒を使つての行商人である。またラオの古老男性は例外なく、強力な守護力を秘めた宗教的知識「ウィサー」[林 1996b] を持っていた人びととして語る。彼らクラーは、国境もどの集落の境界も頓着せずに越えて行き、盗賊や熱病の危害も畏れずに遠くへ歩んでで行ける男のなかの男、として語られる。

当時のクラーがラオの妻をめとってそのまま暮らし、末裔が残る集落がある。ウボン県クアンナイ郡のNC, NY村, ヤソートン県マーチャナチャイ郡のBK村である。それらの集落の年老いた女性たちが語るクラーは、「裕福で善人」「銀や金、すべてをもつ人」「勤勉」「ラオの妻と家族を捨てなかった人」「敬虔なる仏教徒」「ラオの娘なら皆結婚したがった」等々というものである。結婚したクラーは、妻方の両親の農地を耕した。何人かのクラーは土が固いために、田植えのときに指をよく傷つけた。農閑期がくると、やはり集団を組んで行商にでた。婚入後は、余剰米やサトウキビの煮汁を固形にしたもの、その他のものを天秤棒に担いで売りにでた。

NY村 [T. KY, A. Khuang Nai, C. Ubon Ratchathani]

【B氏／男子／1913年生】

12歳のとき（1925年）に村にやってきた12人のクラーの名前をすらすらと思い出す。そのうち8人が行商人、4人は僧侶であった。

彼らはラオの妻をめとった。僧侶のうち一人はこちらへ来てから還俗しラオの娘と結婚した。他の三人は生涯僧侶のままでこの村で亡くなった。

初めて彼らがこの村にやってきたとき、天秤棒の荷担ぎを手伝うチェンマイ、ランパーン地方の出身者（ラオの古老は「ナーン」と総称する）が同行していた。クラーに雇われた助手で、年間12バーツの賃金をもらっていた。当時は、タイ北部、東北部でみられる柄

14) チュラーロンコーン大学アジア研究所講師スネート氏の教示による。 *Judson's Burmese-English Dictionary* 1953 (revised ed. 1966) p.194では「カラー」には a) a native of any country west of Burma; b) a foreigner とある。次にくる「カラー・パ・ユ *kala phayu*」には、 a white foreigner (American, European) とある。 *pha yu* とは「白」。

をつけた綿布、絹布を売っていた。1 ワー（2 m 長）あたり25サタンから50サタンだった。行商のクラーは金をバンド状の腰布にいれて腹にまきつけていた。金だけではなく、精米したコメもそこに入れていた。天秤棒で担ぐと重いからである。東北タイの人は、一目見てクラーとわかれば、彼らを襲うことがあった。でも、クラーはすごい呪符(*khatha*)をもっていて、殺されたりすることはなかったらしい。

……当時、ラオの村人はふたつの仕事をしていた。水稻耕作と行商である。当時の商売は利益を得るのに苦労した。とってきた魚や豚、牛の肉をうる。[村のなかや周辺だけでは]1 日よくても4-5サタンの金を得るのがせいぜいである。オスの成牛一頭が1 パーツ50サタンした時代である。アヒルやニワトリも売った。村ではウルチ種もモチ種もコメは等価 (*saen labat* / 120kg 当り 1 パーツ) で交換された。ある者は水田耕作しながら鍛冶や彫金もやった。だが、しれたものだった。普通は交換になってしまい、利益はほとんどなかった。欲しかったのはお金だ。ちょうど20歳（1933年）になってから[太陽暦の]12月から4月の農閑期に[ウボン市内の華人から委託された]一対10サタンの耳飾りや首飾りを、3-5人の友人たちと東北の村々で売り始めた。他のもの[蚊帳や化学染料など]も毎年そうやって売り歩き、年にして12パーツから30パーツの利益がでるようになった。

村のクラーたちも、同じように行商にでた。われわれとは別行動である。同じルートもとらない。やり方も異なっていた。われわれは用意したものが売れてなくなるとすぐに帰村した。クラーは、用意した品物を売るだけではない。あがった儲けを使ってさらに別のものを行く先々で買い、他所で売る。これを繰り返す。だからどんどん遠くへでかける。ずっと長く村を出払うことになるが、最終的な儲けはわれわれと大差あるものではなかった。クラーが行商にでたのは12月である。クラーの人びとは、多くがラオの妻を得ていたので水田耕作もしていた。彼らは雨季になると外へでない。だが、われわれは田植が終わってすぐにでかけることもあった。売れるものがあればでかけた。鍛冶師も一緒にでかけた。

東北タイのラオの行商といえば、従来ナーイ・ホーイ(*nai hoi*)が知られる。とりわけ商品米の急激な需要をもたらしたボウリング条約（1885年）以降、農閑期に水牛や牛を集めてナコンラーチャーシーマーへ集団で売りにでた人びとがいる。その活動は、上のような小規模な行商を組織化したものである。したがって誰もがナーイ・ホーイであったわけではない。当地においては、ナーイ・ホーイとは一時的であれ組織的な行商活動の主導者をさす名辞である。一人の長と複数名の雇われ助手が隊をなして行動する。ナーイ・ホーイには牛車やファ・カセーンと呼ばれる運搬用舟艇¹⁵⁾を調達し、各地に物を買付ける経済的余裕と旅程上の判断力が必要とされた。ムーン川流域の広範囲の集落では、今日も古老たちが「勲章をもらっていい男」と語りつぐ、数名のナーイ・ホーイが確認される。牛車と運搬用舟艇数隻を所有して水牛行商隊と

ウボンの精米所へのコメ配送¹⁵⁾をとりしきっていたナーイ・ホーイ・スック（故人）とその一族である。彼らは水稻耕作者であったが、ナーイ・ホーイになれた者は父親がナーイ・ホーイの場合だけであったとする見方もある。元手がいるためである。かつてナーイ・ホーイの雇われ助手として水牛行商隊に数回同行参加した経験をもつ古老は次のようにいう。「当時、ラオの男たちは皆ナーイ・ホーイになりたがった。しかし、なれなかった。ナーイ・ホーイの条件とは、収量の良い水田があつて勤勉、そして『儉約家 *kin khaokamakok*』であること。危険な仕事でもあつたから勇敢でなければ務まらなかった」。

地方における華人の経済的役割がその種類、程度において飛躍的に拡大するのはボウリング条約以降のことである。現在の古老が回想する当時のラオの行商活動は、その華人の影響を得た地方内部での交易増加という時代を背景としていることに留意する必要がある [Skinner 1957:107-108]。「余剰米がないと（行商用製品の）買付けができなかった」といわれるように、現時点でナーイ・ホーイが語られる背景には、コメもしくは余剰の産品が、市場にでまわりはじめた商品（服、染色剤）を入手する手段として認知されていたことによる。雇われ人夫でなくナーイ・ホーイのような高利潤を生む隊商を組織できなかった多くの人びとは、販売のためにナコンラーチャシーマーやバンコクに売りにでることは困難だった。それ故に余ったコメ（ウルチ種）は華人が経営する最寄の精米所へ売りにだされた。また、自村やその周辺に余っているコメを買い、他所へ売りにでかけた例も多い。1930年代から40年代にかけて村内で余るコメを1セーン（120kg）当たり1～2バーツで購入し、それを10サルン（2.5バーツ）で売る。さらに、実際に扱われたのはコメだけではない。ある者は、コメを買い集めそれぞれの村に設置したコメ倉に収納後に、複数の集落で綿布、白絹布、糸なども同時に調達し、東北タイはもちろんバンコクまで売りにでかけた経験をもっている。そして年に2-3回はそうしたことを繰り返している。

東北タイでしられるナーイ・ホーイには、水牛を中部タイへ売りにでるのをナーイ・ホーイ・クワイ *nai hoi khwai*、舟を使って余剰米を売るものをナーイ・ホーイ・フア *nai hoi hua* [rua] というように、さまざまなタイプがあつた。さらに、牛車をもち、綿やたいまつなど、個々の集落のそれぞれの産品を集めて他所で売りにでたプータイは、ナコンパノム周辺の集落

15) フア・カセーンは標準規模のもので12ソーク×12ソーク（6メートル幅／高）、積載重量5,000ムー（60トン）、舟内で12-13人が寝れたという。本文中のナーイ・ホーイ・フアは積載量78トン級を3隻常時保有し、最盛期には66トン級2隻を借りて計5隻を使用していた。貸し手は舟はもつが各地にコメ買付けをする元手をもたなかった。借り賃はムーあたり1バーツ。ハーブ単位で5バーツ（1940年代）。

16) ナーイ・ホーイ・スックが持ち込んでいたウボンの精米所は、その未亡人の記憶によると、買値を取り決めていた Rong Si Pia Phao, Rong Si Sun Siang の2カ所である。ウボン全体では1940年代時点で5カ所の精米所があつた。なお、1931年時点で東北タイ全体に存在したのは華人経営による33カ所という [cf. Ingram 1971:70]。

ではナーイ・ホーイ・クイアン *nai hoi khwian* としていられている。ナーイ・ホーイの名辞が与えられるのは、いかなる理由か、東北タイではタイ語系の話者であるラオとプータイのみである。あるいは、両者ともに、クラーや前出のスウェイと異なり機動力をもって行商をしている。

前述の古老によれば、クラーはまた、集落の寺院に多大な貢献をしている。建造物を修復したり、ビルマ側からもってこさせた経典を献納している。さらに、ラオの集落に新しい食習慣をもたらした。野菜の煮込み、ハンレーと呼ばれるゴマ油を使った豚肉料理、喫茶、バナナ葉のロングサイズ葉巻煙草、そして「カオ・チャオ・クラー」とよばれるウルチ米である。この名称は、クラーの婚入例がなくとも、何らかのかたちで彼らと接触をもったラオ人集落には広く語りつがれている。

クラーはここ〔ウボン県クアンナイ郡 KY 村〕に暮らすようになって、寺院を作った。その寺はワット・トゥン・クラーとよばれる。15歳〔1928年〕のときだった。寺院ができたその年に、自分の両親〔ともにラオ〕はクラーが植えていたカオ・チャオ・クラーを植え始めた。以後、わたしの家族は朝と昼はモチ、夜はウルチをとるようになった。当時耕作していた水田の2割ほどを植えた。その他は、7割がモチ種で（内訳：6割が品種名 *khao i tom*、1割が *khaodo*）、あと1割がそれまで植えていたウルチ種（*khao cao phounthong* = *khao daeng*）だった。この割合は〔政府推奨品種が広まった〕最近まで、ほとんど変わることにはなかった。

どのように呼ばれる民族であろうと、東北タイでコメを作る人びとは、土地の高低、雨水の多少、土壌の質を基本的な尺度に、田圃の良し悪しいし特徴を詳細に類型化してきている。一般に最上の田圃（水田）とは、低位で豊かな地味をもつ所である。かつては、当然のことながら、さまざまに分類される地所にもっとも適したコメ品種が選択的に求められ、植えられてきた。ただし、政府が推奨する品種が広まった現在ではそうした在来種は、一部を残してほとんどみられなくなっている。

表2は調査対象となった集落において、60代半ば以上の高齢のインフォーマントにたいして、約50年前に植えていた品種は何かと問うた結果である。1930年代前後から40年代にかけて東北タイで植えられていたコメ品種の「民俗名」である。すでに現存しないにも関わらず、インフォーマントは例外なく品種について驚くべき鮮明な記憶と詳細な知識をもっている。ある者は、個々の品種について、形象、色、手触りから味、保存状況にいたるまで、自己が扱ってきた他品種と比較しつつ、生き生きとコメントを与えた。インフォーマントの半数以上がラオであったために、表ではモチ品種名が優越する。だが、モチ種を主食としてきたのはラオとプータイで、

表2 調査対象村における1930-40年代にかけてのコメ品種

A: Glutinous Type 120 Varieties Including 17 of Upland Rice

A-1 Wet Rice

[A-1-1] “khao do” — early maturing variety

M019	khao hang hi [5] Lao *	“planted especially in the season of rainfall shortage”
M025	khao hing hi (khao ni ni) [1] Lao *	“can harvest within two months”
M005 *	khao daeng suwang [1] Lao	
M043	khao i tom (khao khi tom) [4] Lao	
M068	khao luang kaeo [4] Kula → Lao, Phuthai + Kaloeng	
M010	khao do dam [2] Lao *	“khao mak muai noi follows as early maturing variety”
M016	khao do sam duan [2] Lao	
M009	khao do daeng [1] Lao	
M011	khao do dang [1] Lao *	“produced formerly at the paddy in the forest (na khok)”
M012	khao do khao ngu [1] Lao	“taste like khao sanpatong”
M013	khao do khi sut [1] Phuthai	
M021	khao hom do [1] Phuthai	
M027	khao hom nang nuwan [1] Kaloeng	
M028	khao hom thong [1] Kaloeng	
M032	khao i hao [1] Khmer	
M035	khao i nok (throh do) [1] So	
M038	khao i pon [1] Lao	
M042	khao ii tok [2] Lao *	“used to plant in the most unbeautiful paddy land”
M044	khao i tu [1] Lao	
M052	khao kap nyang [3] Lao + Kaloeng	
M055	khao khao do [1] Lao	
M059	khao khi [1] Lao	
M062	khao khiao ngu [1] Lao	
M063	khao kon bung [1] Lao	
M069	khao luk phung [1] Lao	
M070	khao ma kham [1] Lao *	“it was planted in paddy lands in forest”
M071	khao ma yom [1] Phuthai	
M079	khao mak muai noi [1] Lao	
M083	khao man ngua [1] Phuthai	
M084	khao matun dam [1] So	
M085	khao mon khai [1] Lao	
M087	khao nam pun [1] Lao	
M088	khao num phung [2] Lao *	“used to plant in paddy lands in forest”
M091	khao nang suan [1] Lao	
M097	khao nok kot [1] Phuthai	
M102	khao p(l)a kheng [1] Lao	
M112	khao phun [1] Lao	
M001	khao bak muai [1] Lao	
↓		
M113	khao pong eo [8] Kula → Lao, Swei *	early/medium maturing character
M078	khao mak muai (throh a muai) [8] Lao + Swei	
M073	khao mae hang [2] Phuthai + Lao	
↓		

[A-1-2] “khao kang” — medium maturing variety

M031	khao i dang [3] Lao	
M007	khao dam daeng [1] Lao	
M008	khao dam phaa [1] Lao	
M015	khao do noi [1] Lao	
M022	khao hom klang [1] Phuthai	
M031	khao i dang [3] Lao	

表2 ーつづき

M033	khao i khao [1] Phuthai
M039	khao i pong [1] Phuthai
M041	khao i tok [1] Lao
M048	khao in tok [2] Phuthai
M053	khao khaen ngu [2] Lao
M056	khao khao nyai [2] Lao
M077	khao mak kham [1] Lao
M101	khao nyai lao [1] Lao
M103	khao pla kheng [1] Phuthai
M104	khao p(l)a lat [1] Lao
M109	khao pho khen [1] Lao
M115	khao ta mai [1] Phuthai
M116	khao tap moei [1] Kaloeng
↓	
M081	khao mak pho [1] Lao *medium/late maturing character
M060	khao khi tom [4] Lao
M054	khao khao [2] Lao
M034 *	khao i mum [6] Lao
↓	
[A-1-3] “khao nak (ngan)” — late maturing variety	
M051	khao kam [8] Lao + Khmer + So
M114	khao sethi [3] Lao
M005 *	khao daeng suwang [1] Lao
M006	khao daeng suwan [1] Lao
M002	khao chanpatong (Khao sanpatong) [1] Lao
M003	khao daeng dok can [1] Lao
M004	khao daeng kon [1] Lao
M017	khao dok du [1] Kula → Lao
M018	khao hang dok [1] Phuthai
M029	khao i dam dang [1] Lao
M030	khao i bu [1] Lao
M057	khao khao khung (khao khao kung) [2] Lao
M058	khao khao thip [1] Lao
M061	khao khi tom khao [1] Lao
M064	khao sanpatong [1] Lao
M065	khao kung [1] Lao *“can grow even in the season of draught as well as flood”
M066	khao ling haet [1] Lao
M072	khao ma yaeng [1] Lao
M074	khao mae hang nyai (throh ngan mae hang phut: So) [1] So
M075	khao mae hang noi (throh ngan mae hang koei: So) [1] So
M080	khao mak nyom [1] Lao → So
M082	khao mak pho [1] Lao
M086	khao nam an [1] Lao
M089	khao nang kuak [1] Kula → Lao
M090	khao nang nuan [1] Lao
M092	khao ngan nyai [1] Lao
M094	khao niao nyai [2] Lao *“not delicious but planted”
M095	khao noi [1] Lao
M100	khao nyai (khao i mum) [1] Lao
M105	khao phla lat [1] Lao
M106	khao phama [2] Kula → Lao
M107	khao phama dam [2] Lao
M108	khao phama khao [2] Lao
M110	khao phua [1] Lao

表2 一つづき

M111	khao phua mia [1] Lao
M117	khao thip [1] Phuthai
M118	khao thua lian [1] Phuthai * <i>“the best variety in the past”</i>

[A-1-4] “khao loi” — floating rice variety

M067	khao loi [1] Lao * <i>“not delicious but easy to cultivate”</i>
------	---

A-2 Upland Rice

[A-2-1] “khao do” — early maturing variety

M024	khao hin hi [2] Lao <i>“can harvest within two months”</i>
M093	khao ni ni [1] Lao
M014	khao do niao [1] Lao * <i>“needed to get sufficient rice when make new paddy fields”</i>
M020	khao hao [2] Phuthai + Kaloeng * <i>ear plucking among the Kaloeng</i>
M023	khao hao mak kok [1] Phuthai → Lao
M036	khao i non (thrau i non: Khmer) [2] Lao + Khmer
M037	khao i po [2] Phuthai → Lao
M040	khao i rai (thrau i rai: Khmer) [1] Lao → Khmer
M045	khao i tui [1] Kaloeng * <i>ear plucking</i>
M046	khao ibu do [1] Kaloeng * <i>ear plucking</i>
M076	khao mak hing [1] Kaloeng * <i>ear plucking</i>
M098	khao non hai [1] Lao
M099	khao nong du (tharao nong: Khmer) [1] Lao → Khmer

[A-2-2] “khao kang” — medium maturing variety

none

[A-2-3] “khao nak (ngan)” — late maturing variety

M034 *	khao i mum [1] Khmer * <i>“all of the glutinous varieties came from outside”</i>
M047	khao ibu ngan [1] Kaloeng * <i>ear plucking</i>
M049	khao ken du [1] Kaloeng * <i>ear plucking</i>
M050	khao keo ma [1] Kaloeng * <i>ear plucking</i>

B: Non-Glutinous Type 32 Varieties Including 9 of Upland Rice

B-1 Wet Rice

[B-1-1] “khao do” — early maturing variety

U014	khao chalik (tharao chalik: Khmer) [1] Khmer
U015	khao dok cok [1] Lao → Khmer
U020	khao mali kao (tharao mali: Khmer) [1] Khmer
U021	khao mali do [1] Lao
U023	khao mao mali (tharao mali tae noep: Khmer) [1] Khmer
U026	khao pin kao [1] Lao * <i>“rice to sell as like khao dok mali today”</i>

[B-1-2] “khao kang” — medium maturing variety

U022	khao manphet (tharao klantia phet: Khmer) [1] Khmer
U027	khao sam phuan [1] Lao → Khmer

[B-1-3] “khao nak (ngan)” — late maturing variety

U003	khao cao daeng [21] Lao + Phuthai + Kaloeng + So (khao chao phan thong; khao cao khao pun) (throh ya daeng; So)
U004	khao cao khao (throh ya klok: So) [4] Lao + So
U007	khao cao kula [3] Kula → Lao
U013	khao cao saen phan [3] Lao

林：「ラオ」の所在

表2-つづき

U005	khao cao khi khwai [1] Yoi
U006	khao eao ko kho Jisip sam [1] Lao
U009	khao cao luang [1] Lao
U010	khao cao luk p(l)a [3] Lao
U011	khao cao mae hang [1] Lao
U012	khao cao nga sang (khao nga sang: khao dok ka yom) [1] Lao
U018	khao khao noi [1] Lao
U024	khao nang kham [1] Phuthai
U029	khao ta haeng (khao sai bua) [2] Lao *it needs ample water
[B-1-4] “khao loi” — floating rice variety	
U008	khao cao loi, khao cao loi nam [2] Lao *late maturing type, 4-6m height
U002	khao cao cek soei [1] Lao *planted in the ill-drained land (na nong)
B-2 Upland Rice	
[B-2-1] “khao do” — early maturing variety	
U016	khao dok fai (thrau phakha krabash. Khmer) [2] Khmer
U030	tharao chaloei phut [1] Khmer
U032	thrao poe [1] Khmer
[B-2-2] “khao kang” — medium maturing variety	
U017	khao hom sawan (thrau hom sawan) [1] Khmer
U019	khao khrap throp [1] Lao → Khmer
U025	khao nang ok [1] Lao → Khmer
U028	khao sathuan [1] Lao → Khmer
U031	tharao throp thraep [1] Khmer
U033	thrao khuar [1] Khmer *extinct in 1969
[B-2-3] “khao nak (ngan)” — late maturing variety	
none	

出所：東北地方5県（注1参照）34カ村における聴取により筆者作成。

クメールはウルチ種を主食としてきたことが顕著に示されている。ラオとプータイは、品種名をあげるときモチ種の品種名には粘りを意味する「ニアオ」を入れず、ウルチ種に言及するときに例外なく「チャオ」をつけて個々の名を続ける。

表が示すように、ラオやプータイはモチ種を主食とするが、少数ながら必ずウルチ種が植えられている。しかもその品種はほぼ同じカオ・チャオ・デー [U003] である。これは儀礼のときに作るコメそうめん (*khao pun; khanom chin*) 用のために植えられたと回答されている。そして逆に、ウルチ種を主食とするクメールが、同様の理由でモチ種を菓子用として植えている。儀礼食用に主食とは異なる品種がそれぞれ継承されてきたことがわかる。つまり、その生活様式において、それぞれの言語集団では二種類のコメが植えられている。

さらに興味深い結果は、ほとんどの陸稲品種のモチ米がラオ（8例）とカルーン（7例）によって植えられていたのにたいし、陸稲品種のウルチ米はクメール（8例）において卓越していることである。そして、水稻品種で早稲種のモチ米を数多く植えているのはラオである。唯一ス

ウェイを除いて、東北タイの言語集団はコメを分類する基準に、カオ・ドー（早稲）、カオ・カーン（中稲）、カオ・ナックないしカオ・ンガン（晩稲）をもっている。いうまでもなくこの区別は相対的なものである。ある集落で早稲として植えられる同じ名前の品種が、別の集落では中稲であったりする。同様に、中稲が他のところでは晩稲として植えられていたりもするからである。にもかかわらず、旱魃の年にも収穫できる早稲種を数多く植えていたことが示されている。モチ種の [M019, M025] はその代表で、畑のような地所ないし森林のなかにつくられた水田(*na dong*)のような水条件が悪いところでも、二カ月に収穫できるコメとして語られている。

表中に「→」を付してある品種は、ある言語集団から別の言語集団へと紹介されたことを示す。つまり、クラーがラオにもたらしたウルチ種のカオ・チャオ・クラー[U007]やモチ種のカオ・パマー [M106] のみならず、それらの品種がどこの人びとからもたらされたものかがきわめて明瞭に記憶されている。ラオのいくつかの集落では、プータイから陸稲モチ米の早稲種を得ている [M023, M037]。また、クメールはモチ米のある品種 [M040, M099] だけではなく、彼らの主食とする水稻ウルチ米の早稲種[U015, U027]、陸稲ウルチの中稲種[U019, U025, U028]などをラオから得ている。事例数が限られているので推測の域をでるものではないが、よりよい耕地探しのために、行商もしながら各地を動き回った人びとこそ、コメ品種の交換や見知らぬ集落への紹介の機会を多くもつことになった。乾燥地としてのコラート高原上のコメ耕作状況を考慮すると、そのような移動と交渉のネットワークこそが、東北地方の周縁地域にまでコメ地帯を拡大したラオの開拓状況を生みだしたとみられるのである。あちこち行き着く土地に合う「変わり種」を求める行動に、前述の「非ラオ」人による共通したラオ人観も透視できるであろう。

こうした在来品種はそのほとんどが1960年代に東北タイから姿を消した。一例をあげると、シーサケート県のあるクメールの集落では、かつての自家消費用であったウルチ種[U015]は、現在では全国各地にあるカオ・ドーク・マリにとってかわられている。洪水にも強かったと回顧されるこの品種は、行商でやってきたウボンからのラオ人がその集落にもたらずまで、存在をしられていなかった。当時では、クメールが以前から植えていた陸稲種 [U016, U017] が好まれたが、1960年代初めに換金作物として入ったケナフ栽培に畑地を譲り、いずれもなくなってしまう。他の集落でも、およそ在来種の消滅は多くの場合、それが暮らし向きをよくするか（金になるか）否かによって取捨選択されてきた。政府が推奨する品種が現在植えられるのも、収量の増大という点で明らかに改善された点が認知されて故のことなのである。もっとも、言語集団の違いを問わず、在来種の風味を懐かしむ者もいて、自給用にわずかばかりの在来種を残す集落もあるが、いずれにせよ減少の一途をたどっている。

在来品種は、中央政府から遠く離れた東北タイという地域での、ある時期に展開された民族

間関係の記憶を刻みこんでいる。そしてその消滅過程は、生活様式の均質化とともに首都中央の政策や市場経済の強力な影響を明瞭に映している。結果的に、東北地方における人びとを相互に差異化する尺度が、言語、慣習を含む文化上の相違よりも、以前にも増して身につけるもの、耐久消費財などの有無といった暮らし向きを映す経済的な状況の相違ないし優劣という観点から与えられる傾向を一層強くしている。

同地方で新参者の「ラオ」は、自給自足の社会生活を足場にしてさらなる富を得る活動（土地転がしや行商）に長じた人びとであった。その文脈では、かつてラオスのタイ・ルーの移住過程を検討したイジコヴィッツが、収穫米を増加させる田圃のみならずより高い地位を求めている移動を彼らの社会のなかにみたことは [Izikowitz 1963:180-182]、東北タイのラオの場合にもそのまま該当するように思われる。そして、それを望んだ隣人たちは、ことごとくラオを羨ましくも同地域に生きる望ましい模範とした人びとである。その点では、行商活動に携わってきたラオ（加えて少数ながらプータイ）は、全般的にみてそうではないスウェー、クメールやカルーンよりも、自己を社会的地位に関して優位な立場にある者とみている。このような自他関係の定位づけは、近年の階層差を説明する際のフォーマットとして今日も有意性を失っていない。

Ⅵ 「地域間交流」のなかで

1994年4月8日にタイ東北地方の国境の町ノーンカイとラオスの首都ヴィエンチャンを結ぶ「タイ・ラオス友好橋」が開通した。¹⁷⁾ この橋の名称が示唆するように、現在、ラオスとタイは密接な国家間関係をもちつつある。経済関係にもそれは顕著である。1986年以降、貿易や直接投資といった民間経済交流のみならず、政府間経済協力関係も着実に緊密化してきている。1992年2月19日にはタイ＝ラオス友好協力条約と観光協力協定が締結された。

両者の関係は経済・商取引ばかりではない。友好橋の開通以前の1993年9月に、ヴィエンチャンで非営利団体「タイーラオ協会」（表3）が設立され、企業家、政府官僚のみならず大学関係者も名を連ねて定期的な経済、社会、学術・文化交流が行われている。1995年11月には同協会とラオス側の「ラオスータイ友好協会」の共同主催でルアンパバンのセーンスッカーラム寺へのパーパー儀礼（出安居後の黄衣献納）が実施された。このきわめて良好なタイとラオス関係は、1986年に社会主義国ラオスが自由主義経済原理を導入することを採択し88年に時のタイ首相チャチャイが「インドシナを戦場から市場へ」と謳って以降のことである。ラオスが社会主義化した前後では、国境を接する両国はたえざる緊張・断絶状態にあった。メコン川を

17) 翌年5月までに6,452台の車がタイ側からラオスに入り、利用者は95年1月から5月中旬までの間で111,951人にのぼる [Bangkok Post, 18 May 1995]。

表3 タイ・ラオ協会 (samakhom Thai-Lao)

1993年設立：政治、社会、文化の理解と相互交流を実施する半官半民の非営利団体
協会の事務活動は外務省東アジア局東アジア課
以下の数値は1995年時点でのメンバー数

1. 協会委員会	15
(khanakammakan samakhom Thai-Lao)	
2. 協会審議会	10
(thi pruksa khana kammakan samakhom Thai-Lao)	
3. 協会名誉会員	14
(samachik kitimasak samakhom Thai-Lao)	
4. 協会個人・永年会員	58
(samachik Thai-Lao praphet butkhon thammada [talot chip])	
5. 協会法人・永年会員	25
(samachik samakhom Thai-Lao praphet niti butkhon [talot chip])	
6. 協会個人・年会員	6
(samachik samakhom Thai-Lao praphet butkhon thammada [rai pi])	
7. 協会法人・年会員	7
(samachik samakhom Thai-Lao nitibutkhon [rai pi])	
8. 協会研究所法人・永年会員	2
(samachik Thai-Lao praphet nitibutkhon thi pen sathaban kansukusa [talot chip])	

出所：内部資料より筆者作成。

挟みでの紛争や確執が88年前半まで続いたことを思えば [cf. Wijeyewardene 1989], 両国の距離はビジネスマンとインテリ層主導で90年代以降、急速に縮まったといえる。

広く近年のインドシナの各国間の関係をみれば、中国の参入もあってメコンを挟む東南アジア大陸部の各国は自由市場、経済協力を旗印に急速に接近している。各国を陸路で縦断できるのも時間の問題である。タイは先日アセアンに参加したヴェトナムとともに、経済援助、観光政策を通して同地域のオピニオン・リーダー的な役割を担っている。こうした状況を映すかのように、最近ラオスやカンボジアを訪れたタイ人ライターの見聞記に基づくエッセイ、ガイド本が相次いで出版されている。過去の出来事を現代の体裁で復元し、地域の紐帯をそこに築き上げているかのようにみえる。タイ＝ラオ友好橋開通の祝辞のなかで、16世紀に建立された現ルーイ県の仏塔シーソーン・ハックが両国の旧来の友好を語る歴史表象として言及された。タイ国人ライターのラオス旅行記でも、タイ国とラオスはキョウダイであり「かつて両国間に流された苦い涙は甘い蜜に変わった」と謳っている [Khachatphai 1994]。

北タイとともにメコンと接する東北タイの観光政策もにわかに活況を呈してきている。東北タイは、中部タイへの玄関口となる商業中心地ナコンラーチャシーマーを除き、外貨を得る観光地としては国内で最も遅れをとった。¹⁸⁾ スリンの象祭りは60年代に始まるが、もっぱらウドンのバンチェン遺跡、古クメールの寺院旧跡など文化史跡を喧伝するに留まっていた。国内需要をにらんで県単位に観光収入をもたらす「郷土の伝統行事」が70年代後半から創成され、ロケット儀礼（バンファイ）はヤソートン、入安居儀礼のロウソク祭りをウボン、コーンケン

に絹祭りなど、それぞれ県ごとの「伝統」を揃えた。現在、東北地方には5つの観光局支所が開かれている（表4）。とはいえ、観光収入があるのはその時に限られ、東北タイでは永続的な観光事業促進にはよい材料はないとされてきた。

だが、メコン川を臨む国々が地域の観光振興を総合的な経済戦略とし多くの開発協定にかんする調印をした現在、とくにラオスとの友好関係を通じて、ムクダハーン、サコンナコン、ナコンパノムの三県を管轄するタイ観光局ナコンパノム支局は、メコン・クルージング・ツーリズムを計画している。ナコンパノムからラオス側へは1日10回の定期フェリーを巡航させる。河を挟んでの買物と眺めが「売り」であるという。さらに、メコンに接する東北タイの国境県、ノンカーイ、ムクダハーン、ナコンパノム、シーサケート、ウボンラーチャターニー県のシリントーン副郡内のチョーンメックを、ラオス、カンボジア、タイを含むメコン川観光開発の「拠点」とすべく調査開発プランが計画実施されている。いずれも、外貨獲得とともに国内観光客の動員もみこまれている。そこでは、観光資源は三つに分類される。すなわち、自然風土、宗教的名所旧跡、芸術文化・祭礼である。訪れる観光客の目をひくような伝統的家屋を保存したり、地元の儀礼を積極的に開催すべきことも奨励されている [MWM 1997]。

この東北地方の観光政策の影響は、農村の学校施設、村落開発委員、NGO 関係者にも波及している。地方大学の歴史・社会系の教官は学士論文テーマを郷土文化の記録保存に貢献するものを推奨する。学校教員や村長との共同作業で印刷された「村史」を常置する村もでてきた。また、住民は仏教信仰とは別に、鎮守の森をもつ「村の守護霊 *phiputa*」を祀ってきたが、新たに造成された祠に以前はなかったご神体を造って安置する集落が、とくにラオスと国境を接するウボン県やナコンパノム県に急増している。かつては参加者を村の成員に限って実施され

表4 東北タイの観光局支所設置年

ナコンラーチャシーマー	1978
ウボンラーチャターニー	1987
コーンケン	1990
ウドンターニー	1992
ナコンパノム	1992

出所：TAT 内部資料より筆者作成。

注：1995年現在タイ全国で支局総数17。東北タイ全19県で5。

支所開設順備はかつて東北地方が中央当局に掌握された順に同じ

- 18) 年間500万からの外国人が訪れるタイで観光政策が本格化するのは1970年代に入ってからである。サリット政権の下で発足した観光局の前身「観光促進組織 *ongkon songsaem thongthiao*」(1960)を嚆矢とし、1997年現在国内に22、海外に17の支局をもつ。日本にも東京、大阪、福岡に支所がある。国内支局は重要度順に5管区が区分されている。一等区の中中部地方から南部、北部、東部と続き、東北地方は最下位にランクされる。

たこの祭祀は、村落開発や森林保全の寄金集めの儀礼として、装いも新たに近隣住民や役人をもとりこんでの儀礼として再興している〔林 1992〕。学術調査をした地元大学の教官の指示で「伝統様式」を復元されたある村の守護霊儀礼の様子は、すでに観光局がビデオ編集している。名所旧跡が近くにない多くの集落では、当該住民たちは村に「外貨」をもたらすものとして、この手の作業におおわらわになっている。さらに、東北タイの大学、師範学校の教官が隣国のラオスやベトナムへ赴いて自文化のルーツを探る調査を実施し、その成果を報告する県後援のセミナーが頻繁に開催されるようになった。民族文化の相対的古さ、純血性を最大の関心事とするこの種の研究会は、訪問先で集められた伝統織物や手工芸品の競売で幕を閉じる。

他方、ラオス側での観光政策は着手されたばかりである。1992年にラオスを訪れた外国人は87,571人であったが、1995年に346,460人に達した。2007年には百万人を越えると推算されている〔SWTT 1997a:11〕。1993年2月22日、経済省副大臣が西暦2000年にむけてのラオス国経済社会開発8年計画のなかで積極的な観光開発政策が打ちだされた。この計画のなかで、ラオス南部地方が農業と観光の拠点としてとらえられている〔SWTT 1997b:244-245〕。具体的には、カムオン、サーラワン、アタプー、サワンナケート、セーコーン、チャンパサックの6県である。カムオンを輸出産業の拠点にし、サワンナケートを隣接国家間の自由交易(*kankhaseri*)と観光の区画に、チャンパサックを商業と観光の拠点とするという計画である〔*ibid.*:245〕。モン＝クメール系諸語族が集住するセーコーン、アタプーはいずれも観光拠点とはなっていない。ラオス側は「民族」を積極的な観光資源として公式には表明していない。しかし、タイ観光局側からの援助指導もあって、先に世界文化遺産となったルアンパバーンの旧王宮博物館、ワットプーやジャール平原などの「古代遺跡」のみならず「植民地時代の欧風建築物を残す文化豊かな国」、政府が苦慮する多民族状況さえも「エキゾティックな民族文化の宝庫」とうたい、観光客誘致の標語としている。また、積極的な動きは県レベルではより顕著にうちだされている。それが国境地域における「民族博物館」構想である。西南中国雲南省と接するポンサーリー、北タイはチェンライ県の対岸のボケーオ県ではすでに開館ないし、建設途上にある。農村レベルでは低地ラオの集落を主とする村おこし運動が「名産品」(織物、酒、土器、彫金等)の振興というかたちでみられる。しかし他方で、モン＝クメール系諸語族(山腹ラオ)は、従来の同胞化政策によって惹起されたラオ化によって脱「自文化」化を進めてきたケースが多い。自文化を賞揚しながらの多民族共存の国是は、それゆえに対外的に民族を観光資源として扱えないという、矛盾した状況におかれている。

「友好橋」の架橋は、タイ、ラオス両国間関係を表向きには接近させ、自国の観光資源をさらに開発する契機となっている。しかし、それぞれの様態で「自文化」を構築する東北タイとラオスのラオ人の社会に、民族同一性や結束を喚起するような具体的な作用はほとんどみられない。ラオス側のラオ人、とりわけ農村部の住人は、東北タイへ移住したかつての隣人とは多

く没交渉のままであるし、東北タイの現況についてもほとんど関心を示すことがない。むしろ、それぞれ国是とする「社会発展」の文脈で、地域や国境を越えるグローバルな「商品化の文化」を熟知する為政者、識字者ないし高学歴者による謹製プログラムが、外貨獲得に直結する資源発掘を説きつつ、ローカルな「文化の商品化」を促進している動きをこそみることができる。その商品化の過程にかかわる当該の地域住民や民族は、そのことを通じて個別の「民族」ではなく、その対極にある国家への帰属意識を逆に強めているように思われる。すなわち、橋は国と国を架けたのであり、民族としてのラオは一層ローカルな領域に拡散、沈潜し、観光者のような一時的訪問者の視線からは隔てられている。

Ⅶ むすびにかえて

政治的に分断された民族と国家の狭間に、人びとによって生きられてきたそれぞれの「場」がある。ラオスで生まれ東北タイに暮らした人びとが、長い内戦を経てヴィエンチャンやパークセーを訪れたとき、すでに老境に入った彼らはその地を踏むなり、足下の土を指でつまみあげて頭にかけたという。それは、故地ラオスへ戻りたい、自分がラオであることを示す所作だったと説明したラオスの革命党員がいる。「30年戦争」を生き抜いてきた年輩のラオ人女性には、現在のタイ国をレイプや交通事故が日々起こり、エイズが蔓延している国という、ネガティブなまなざしを向ける人が多い。メコン兩岸を往来する舟は多いが、川岸に住みながらタイ側へ一度も渡ったことがないという女性も少なくない。内戦の時代以降に生まれ育ったふたつのラオ人社会の若者たちは、国境観光を促進する両政府間で謳われる「タイとラオはキョウダイ」という、相互の出自を明らかにする喧伝文にはおよそ無関心である。今日「パーツ経済圏」の脅威がラオス政府側に拡大するなかで、「ラオ国民」なる幻想をそれぞれの方法で使うことはあっても、信じる対象にはしておらず、共有される個別の日常の社会経験をこそ重視しているようにみえる。まさしく「ラオ」はここに生起している。

本稿は差異化の指標としてのラオを国家、地域間の関係の次元で捉えたが、内容的にはラオという名称の運用法をみたにすぎない。そして、ローカルな関係空間のなかで生起するラオと、為政者や国家の構築過程で対象化されるラオとの連続と非連続を示そうとした。さらに、今日の地域間の観光開発における民族呼称としてのラオの様相についても触れた。両国の同じ言語を使う新世代人が同じ土俵を共有しつつある側面は、リアリティが極小化してゆく「民族」の同一性を越え、相互に外国人であると認識させる国境も後退させるかのようにみせる現実である。これは、文化としての消費主義が構築するものである。政府の重鎮のみならず、一般のタイ人やイサーンの若者を虜にしている消費主義は、隣国ラオスのラオの人びとにも共通してみられる。ラオスの役職者にはタイ国側に渡り私腹を肥やす者が多い。ただし、相互に往来があ

る場合でも、東北タイのラオ人との関わりは個人経験の域をでることはない。人びとは「ラオ」についての教条主義的な理屈も注釈も、何ら必要としていないように見える。ラオス当局がタイとの国境を意識するのは、かような状況を認知するからである。その強力な媒体が、ふたつのラオ人社会の間に従来の国家－民族間関係とは異なる新しい地域間関係を演出しつつ生みだしてゆくとみることは、少なくとも現状を大きく見誤った認識ではない。

しかし、定住調査であれ広域調査であれ、集落単位ないし集落の連鎖のなかに「民族」を捉える立場をとる者には、そこで国策の影響を顕著なものとしてみると同時に、そうした匿名の領域から発せられる声とは無関係に、ほとんど確証のない記述しがたい内容として、個々の日常生活世界の圧倒的な存在感にもとられる。観察者は、ある集落のスポークスマンのような村人が外部者にたいして復唱する「演説」によって生きられる文化から隔てられはするが、その語り部自身の背後に生き生きとした異質な現実の存在を経験することが多い。民族や「地域」をめぐる表象が、国民国家を軸に円環的な構造をもって累積する今日、このようなオーラリティの世界で沈潜するかのように生起する社会的行為の領域への視点を求め続けるならば、異国人が民族という他者の文化を、他者とともに語る場は今後も残されている。

文 献

- Bangkok Post, 18 May 1995.
- Breazeale, K. 1975. The Integration of Lao States in the Thai Kingdom. Ph. D. dissertation, Oxford University.
- Briggs, Lawrence Palmer. 1949. The Appearance and Historical Usage of the Terms Tai, Thai, Siamese and Lao. *Journal of the American Oriental Society* 69:60-73.
- Brown, David. 1994. *The State and Ethnic Politics in Southeast Asia*. London: Routledge.
- Chayan Wanthanaphut et al., eds. 1991. *Raingan kan prachum thang wichakan: Kan wichai thang chattiphan nai Lao-Thai*. Chiang Mai: Sathaban Wichai Sangkhom Mahawithayalai Chiang Mai (『研究集会報告－ラオスとタイ国における民族学的研究』).
- Chazee, Laurent. 1995. *Atlas des ethnies et des sous-ethnies du Laos*. Bangkok.
- Chit Phumisak. 1992(1976). *Khwan pen ma khong kham sayam Thai, Lao lae Khom lae Laksana thang Sangkhom khong chu chonchat*. Samnakphim Sayam (チットプミサック. 『タイ族の歴史』坂本比奈子(訳)井村文化事業社. 1993).
- Cohen, Erik. 1991. Bangkok and Isan: The Dynamics of Emergent Regionalism in Thailand. In *Thai Society in Comparative Perspective*, edited by Erik Cohen, pp.67-88. Bangkok: White Lotus.
- Cordell, Helen, ed. 1991. *Laos* [World Bibliographical Series 133]. Oxford: CLIO Press.
- Damrong Ratchanuphap. 1974. *Nithan Borannakhadi*. Krungthep: Khlang Witthaya (『故事伝承』).
- Dodd, William C. 1923. *The Tai Race, Elder Brother of the Chinese*. Iowa: Cedar Rapids.
- 林 行夫. 1985. 「開拓村(ウドンタニ県北モー村)訪問記」『東南アジア研究』23(3):280-294.
- _____. 1992. 「再生する守護霊——タイの社会変化と宗教」『季刊アジアフォーラム』64:20-24. アジアクラブ.
- _____. 1994. 「『まなざし』のなかの民族と異文化——南ラオス調査から」『民博通信』65:33-41.
- _____. 1996a. 「南ラオスにおける民族間関係」『もっと知りたいラオス』綾部恒雄; 石井米雄(編), 80-92ページ所収. 東京: 弘文堂.

- _____. 1996b. 「信仰——ウィサー・境界・地域」『総合的地域研究・東南アジアをさるキーワード』14: 21-22.
- _____. 1996c. 「ラオ人社会をめぐる民族・国家・地域」『総合的地域研究・東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』林 行夫（編），30-78ページ所収.
- Hayashi, Yukio. 1995. Notes on the Inter-ethnic Relation in History: With Special Reference to Mon-Khmer Peoples in Southern Laos. Paper presented at the Seminar on "Ethnic Groups in Sakon Nakhon," 3-5 July, Ratchaphat Institute of Sakon Nakhon, pp.1-26.
- Hickey, Gerald Cannon. 1982. *Sons of the Mountains: Ethnology of the Vietnamese Central Highlands to 1954*. New Haven: Yale University Press.
- Ingram, James. 1971. *Economic Change in Thailand: 1850-1970*. Stanford: Stanford University Press.
- Ishii Yoneo, et al., eds. 1990. *Datchani khonkham nai Kotmai Tra Samduang* [The Computer Cocordance to the Law of the Three Seals]. 5 vols. Bangkok: Amarin Publications.
- Izikowitz, Karl Gustav. 1951. *Lamet: Hill Peasants in French Indochina*. Goteborg: Elanders Boktr.
- _____. 1962. Notes about the Tai. *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 34:73-91.
- _____. 1963. Expansion. *Folk* 5:173-185.
- _____. 1969. Neighbors in Laos. In *Ethnic Groups and Boundaries*, edited by Frederik Barth, pp.135-148. Boston: Little, Brown and Co.
- Kerr, Allen D. 1972. *Lao-English Dictionary*. (2 vols). Washington, D.C.: The Catholic University of America Press.
- Keyes, Charles F. 1966. Ethnic Identity and Loyalty of Villagers in Northeastern Thailand. *Asian Survey* 6: 362-369.
- _____. 1967. *Isan: Regionalism in Northeastern Thailand*. Ithaca: Cornell University Data Paper.
- _____. 1976. In Search of Land: Village Formation in the Central Chi River Valley Northeast Thailand. *Contribution to Asian Studies* 9:45-63.
- _____. 1995. Who Are the Thai?: Reflections on the Invention of Identities. In *Ethnic Identity: Creation, Conflict and Accomodation* (third ed.), edited by Lola Romnucchi-Ross and George A. De Vos, pp.136-160. Walnut Creek, CA: Alta Mira Press.
- Khachatphai Burutphat. 1994. *Lae Lao*. Krungthep: Samnakphim Phrae Phitthaya (『ラオス見聞記』).
- Khambai Yundalat. 1991. Khwam samphan thang chattiphan phao nai prathet Lao. In *Raingan kan prachum thang wichakan: Kan wichai thang chattiphan nai Lao-Thai* [Ethnic Studies in Laos and Thailand], edited by Chayan Wanthanaphut et al., pp. 21-31. Chiang Mai: Sathaban Wichai Sangkhom Mahawitthayalai Chiang Mai (『ラオスにおける民族間関係』).
- Ko Sawatphanit. 1990. *Isan mua wanwan*. Krungthep: Phi Wathin Phaplikhechan (『昔日の東北タイ』).
- Lebar, Frank M., et al., eds. 1964. *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. New Haven: HRAF Press.
- MWM (Mahawitthayalai Mahidol), ed. 1997. *Raingan buongton khronkansuksa chat tham phaen maeob phua prapprung muang chaidang thangkan thongthiao Nongkhai Mukdahan Nakhonphanom Chongmek lae Sisaket* (マヒドン大学編『国境地区（ノンカーイ・ムクダハーン・ナコンパノム・チョーンメック・シーサケート）観光地化適応モデル草案作成研究計画』).
- Mayoury and Pheuiphanh Ngaosyvathn. 1994. *Kith and Kin Politics: The Relationship between Laos and Thailand*. Manila: Journal of Contemporary Asia Publishers.
- MCC (Ministry of Commerce and Communications). 1930. *Siam: Nature and Industry*. Bangkok: Bangkok Times Press.
- McCarthy, James. 1900. *Surveying and Exploring in Siam: With Descriptions of Lao Dependencies and of Battles against the Chinese Haws*. London: John Murray.
- Miller, Carolyn. 1994. Perceptions of Ethnolinguistic Identity, Language Shift and Language Use in Mon-Khmer Language Communities of Northeast Thailand. *Mon-Khmer Studies: A Journal of Southeast Asian Language* 23:83-101.
- 三谷恭之. 1984. 「東南アジア諸言語の系譜」『東南アジアの民族と歴史』大林太良（編），58-78ページ所収. 東京：山川出版社.
- Moerman, Michael. 1968. Being Lue: Uses and Abuses of Ethnic Identification. In *Essays on the Problem of*

- Tribes*, edited by June Helm, pp.153-159. Seattle: American Ethnological Society.
- NGD (National Geographic Department, Vientiane), 1995. *Atlas of the Lao P. D. R.* Vientiane: National Geographic Department.
- Ovesen, Jan. 1993. *Anthropological Reconnaissance in Central Laos: A Study of Local Communities in a Hydro-power Project Area*. Uppsala: Dept. of Cultural Anthropology, Uppsala University.
- Pheuiphanh Ngaosyvathn. 1985. Thai-Lao Relations: A Lao View. *Asian Survey* 25:1242-1259.
- Pricha Uyatrakun; and Kanok Tosurat. n.d. *Sangkhom lae Watthanatham khong Cao Bon* [Kan suksa klum chattiphan nai prathet thai]. Krungthep: Samakhom Sangkhommasat haeng prathet thai (『チャオ・ボンの社会と文化』).
- RBS (Ratchabandit Sathan), ed. 1982. *Photchananukrom chabap ratchabandit sathan pho so 2525*. Krungthep: Samnak phim Akson Charoenthat (『仏暦2525年学士院版国語辞典』).
- Samrit Miwongukhot, ed. 1995. *Sayam Omanaek 2535-2537*. Krungthep: Sayam Banna (『サイアム年鑑』).
- Seidenfaden, Erik. 1958. *The Thai Peoples: The Origins and Habitats*. Bangkok: The Siam Society.
- Sisak Waliphot. 1995. Lao nai Muang Thai. In *Kansuksa Watthanatham Chonchat Thai*, edited by Samnangkhan Khana Kammakan Watthanatham haeng chat, pp.150-169. Krungthep: Samnangkhan Khana Kammakan Watthanatham haeng chat, Kraswong Suksathikan (『タイ国のラオ』).
- Skinner, William J. 1957. *Chinese Society in Thailand: An Analytical History*. Ithaca: Cornell University Press.
- Snit Smuckarn; and Kennon Breazeal. 1988. *A Cultural in Search of Survival: The Phuan of Thailand and Laos*. New Haven: Yale University Southeast Asian Studies.
- SPS (Sapha Pasason Sungsut), ed. 1991. *Latthammanun haeng Sathalanalat Pasathipatai Pasason Lao*. Viangchan: Sapha pasason sungsut (ラオス最高人民会議編『ラオス人民民主共和国憲法』).
- Srisakara Vallibhotama (Sisak Waliphot). 1990. *Aeng Arayatham Isan: Chae lakthan borankhadi Phlik chom na prawattisat Thai*. Krungthep: Samnakphim Matichon (in Thai and English) (『東北タイ (イサーン) 文明の源流』).
- Stuart-Fox, Martin. 1986. *Laos: Politics, Economics and Society*. London: France Pinter Publishers.
- _____. 1996. *Buddhist Kingdom, Marxist State: The Making of Modern Laos*. Bangkok: White Lotus.
- Suchit Wongthet, ed. 1995. *Mukdahan Muang Muk Maenam Khong* [thiraluk nuang nai phithi poet rongraem Mukdahan kraaen hoten]. Krungthep: Samnakphim Matichon (『メコン川岸の真珠市ムクダハーン』).
- Suwilai Premssirrat; and Naraset Pisitpanporn. 1996. Language and Ethnicity on the Khrat Plateau. Paper presented at the Workshop on "Dry Areas in Southeast Asia," held at Kyoto, 21-23 October, 1996, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- SWTT (Sathabanwicai Witthayasat lae Theknoloyi haeng prathet Thai). 1997a. *Luthang kanlongthun lae kanprakopthurakit thongthiao lae borikan nai khwaeng Luang Phrabang lae Campasak Satharanarat Prachathippatai Prachachon Lao. ekasan prakop kanprachum wanphut 15 tulakhom 2540*. Krungthep: Kanthongthiao haeng prathet Thai (国立科学技術研究所編・タイ観光局主催『会議資料・ラオス人民民主共和国ルアンプラバーンとチャンパサックにおける投資と観光サービス産業への道程』).
- _____. 1997b. *Raingan chabap Sombun Khrongkan suksa cattham maebot phua phatthana kan thongthiao khwaeng Luang Phrabang Satharanarat Prachathippatai Prachachon Lao*. Krungthep: Kanthongthiao haeng prathet Thai (国立科学技術研究所編『ラオス人民民主共和国ルアンプラバーン観光開発草案作成研究計画最終報告書』).
- Thawisin Supwatthana. 1988. 'Lao' nai thatsana khong phu pokkhong Thai samai Rattanakosin. Maha Sarakham: Srinakharin Wirot University (『ラタナコーシン期のタイ為政者による『ラオ』観』).
- Thongkam Onmanison. 1992. *Watchananukom Phasa Lao*. Wiangchan: Toyota Foundation (『ラオ語辞典』).
- Toem Wiphakphotchanakit. 1970. *Prawattisat Isan* (lem thi 1 and 2). Krungthep: Samnakphim Samakhom Sankhommasat haeng Prathet Thai (『東北タイの歴史』).
- Waters, Tony. 1990. Laotian Refugeeism 1975-88. In *Patterns of Migration in Southeast Asia*, edited by Robert R. Reed, pp.122-153. Berkeley: University of California at Berkeley.
- Wijeyewardene, Gehan, ed. 1990. *Ethnic Groups across National Boundaries in Mainland Southeast Asia*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

- Wilai Wongsupchat, *et al.*, ed. 1994. *Prachakon khong prathet Thai: Sathiti nai chuong 25 pi (pho so 2511 - 2535)*. Krungthep: Sathaban Prachakonsat, Chulalongkon Mahawitthayalai (『タイの人口25年』).
- WTS (Witthayasat Sangkhom). 1992. *Thongthiao Banda Phao yu Lao: Tourist of Ethnic Groups in Laos*. Vientiane: Witthayasat Sangkhom (『ラオス諸民族巡り』).
- Yule, Henry; and Burnell, A. C. 1902(1886). *Hobson-Jobson: A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive* (new ed.). London: Willam Crooke.